

## 第53回夏季県外史跡踏査

### 山梨県・長野県方面

#### ～武田信玄の治水を中心とした領国経営と近世から現代の松代を訪ねる～

湘南高校定時制 丸山 理

#### 日程

8月1日（金）：海老名駅東口—勝沼 I C—勝沼町（大善寺）—宮町（釈迦堂遺跡博物館）—甲斐市（信玄堤・石積出し二番堤・将棋頭）—（新府城跡）—更埴 I C—宿泊地（千曲市上山田温泉）  
8月2日（土）：宿泊地—（森將軍塚）—松代町（地下壕・象山記念館・松代城跡・真田宝物館）—（川中島古戦場）—長野 I C—上田市（信濃国分寺跡）—東御市市（海野宿）—横浜駅西口

さがみ縦貫道路の海老名 JCT から中央道・関越道が結ばれ、山梨県・長野県方面への移動時間が大幅に短縮できるようになったので、今回の集合場所は海老名駅東口となった。抜けるような青空と猛暑のなか、事故もなく多くの成果を得て2日間の研修を終えることができた。

甲府盆地の東端、一面にぶどう畑が広がる勝沼の丘陵上に「大善寺」がある。国宝の薬師堂は鎌倉時代後期、第9代執権北条貞時によって再建された関東地方では現存最古となる木造建築である。椽皮葺屋根の優美な曲線が美しい（写真①）。別名「ぶどう寺」と呼ばれる所以は奈良時代に行基がこの地へ修行に訪れた際、手に葡萄を持った薬師如来の出現を夢に見て寺院を建立、法薬としての葡萄栽培を人々に教授したという寺伝による。夢見仏を模したとされる本尊の薬師如来像（平安仏）は秘仏であるが、5年ごとに公開されている。圏族の十二神将なども見ごたえがあった。門前の柏尾坂では幕末に近藤勇率いる甲陽鎮撫隊と板垣退助の新政府軍との激戦があったという。

京戸川扇状地の扇中央部に位置する中央道勝沼 P A は、一千個体以上の土偶（一括で国重要文化財に指定されている）を出土した縄文遺跡で、釈迦堂遺跡と名付けられ博物館が建てられた（写真②）。様々な顔の土偶と現代の子どもたちの顔写真が並べられていて面白かった。博物館へはパーキング内から徒歩で見学できるようになっており、夏休みの子どもたちの格好の自由研究の場となっていた。

今回の巡見の目玉の一つである「信玄堤」は甲斐市文化財係長の大蔦正之氏に同行解説していただいた。甲府盆地はその西端を釜無川が北から南へ流れているが、盆地の標高は東端へ向かって低くなる地形となっている。そのため日本三急流の一つである富士川の上流釜無川が氾濫をおこすと、洪水は一気に盆地を呑みこんでしまう。人々が盆地内に安定して居住することは難しく、武田信玄が本格的に治水に乗り出す以前の中世までの遺跡は盆地の周縁にしか分布していない。いわゆる「信玄堤」は、釜無川に枝状に造られた突堤しかイメージしていなかったが、信玄の治水構想はもっと大掛かりなものであった。釜無川の氾濫は、北の信濃側から流れてくる水と甲斐側の南アルプスから流れ込む勅使川の水が合流することで引き起こされる。信玄は「石積出し」（写真③）「将棋頭」「十六石」「堀切」などの諸施設で勅使川の水を次々と分流して釜無川へ合流させ、釜無川主流の水勢を弱める工夫を凝らした。その上で釜無川には「かすみ堤」を築堤し、堤を守るための「聖牛」（写真④）「出し」などの装置を施した。釜無川左岸には竜王河原宿が成立し、堤の維持管理に充てられた住民は他の税が免除されたという（永祿三「1560」年、武田信玄印書<保坂家文書>による）。

国指定史跡、新府城跡は武田勝頼期の平山城で、釜無川と塩川が浸食した七岩里台地上の突端部にある。断崖絶壁を背にして戦闘正面を限定した特異な城である。長篠の戦いに敗れた勝頼が織田軍の侵攻に備えて天正9（1582）年から築城させたもので、年末には勝頼が躑躅ヶ崎館から移住したという。近年の発掘調査で堀や土塁・曲輪などが確認され始めている。新府城跡に沿いながら車窓から見学し、更埴インターから宿泊地の上山田温泉へ向かった。

二日目早朝、昨日夕刻の雷雨で見学できなかった森將軍塚古墳へ向かった。善光寺平（条里制水田遺構や7世紀の木簡が多数出土した更埴遺跡群が展開する）を見渡す丘陵尾根上に100m級の四つの前方後円墳を中心とした埴科古墳群があり、国の史跡となっている。森將軍塚古墳館の運営する小型バスで尾根へ上がる。森將軍塚古墳は4世紀中頃の築造といわれ、長野県内最大の前方後円墳である。曲がった尾根上に築造されたため左右対称ではなく、後円部は楕円形に近い。後円部頂では東日本最大の竪穴式石室が発掘され、石室の壁面には赤い「ベンガラ」が塗られていたことが分かっている。古墳は整備復元（写真⑤）され、貼り石に包まれた墳丘はピラミッドと同じく人工物であることを物語っている。並べられた埴輪列も壮観である。麓には歴史公園がつけられ古墳館（石室の復元・出土遺物の展示）や復元竪穴建物がある。

山国の静かな城下町松代には、延べ13キロにも及ぶ地下壕がある。太平洋戦争末期の1944年11月、本土決戦に備えて、大本営と天皇の御座所などが密かに建設着工された。「松代大本営の保存をすすめる会」会長の目澤民雄氏に案内していただいた。ヘルメットを着装し象山地下壕（政府・電話局・NHKなどが入る予定だった）へ入ると、途端に冷気に満たされた地下空間が広がった（写真⑥）。当時は壕内に大量の木材が搬入され各施設の部屋が造られたというが、終戦とともに木材はすべて東京復興のために撤収されたという。未公開部分の壁面にはハングル文字が残されており、地下壕建設には多くの朝鮮の人々が徴用された事が分かる。地下壕はほかにも舞鶴山地下壕（大本営・天皇御座所予定地）・皆神山地下壕（倉庫群）が保存されている。立ち寄ることはできなかったが、舞鶴山地下壕には戦後、気象庁の精密地震観測室が創設され、1965年の松代群発地震後には松代地震センターが設置された。

続けて佐久間象山（地元では「ぞうざん」と呼称）記念館・松代城跡（写真⑦）を見学。松代城は元々、海津城と呼ばれていた。北信濃に進出した武田信玄が永禄年間（1558～1570）に山本勘助に命じて築かせたものである。城からは川中島平を一望することができ、川中島経略の拠点であったことがわかる。現在の町割りにつながる城下町の形成もはじまり、武田家滅亡後入府した真田信之の頃には完成したという。明治の廃藩置県で廃城となり石垣を残すのみとなったが、平成の大普請で太鼓門や北不明門が復元された。昼食後は真田氏の城下町松代を自由散策した。真夏の日差しが容赦なく降り注ぐ時間帯だった。真田宝物館の冷房が有難かった。時間のやりくりをして川中島古戦場にも寄ることができた。

上田市の信濃国分寺・尼寺は資料館学芸員の児玉貞文氏に解説していただいた。僧寺・尼寺が同時並行して発掘調査された例は全国的にも珍しいという。天平13（741）年に国分寺建立の詔が出された後、いつ竣工されたかが明確に分かっている寺が全国的にもほとんど知られていない中、信濃国分寺は出土瓦の最近の研究から奈良の西隆寺の瓦との関係が深いことが指摘され、西隆寺の瓦職人が移動してきて信濃国分寺の瓦作成の指導にあたり、770年頃に信濃国分寺が完成したのではないかとの見通しを述べられた。資料館で出土遺物を見学した後、僧寺跡を巡回した。

寛永2（1625）年、北国街道田中宿の補助的な宿場として開設された海野宿は「卯建（うだつ）」を上げた格子戸の家並み（写真⑧）がよく残されている。北国街道は加賀前田家をはじめ北陸方面の大名の参勤交代や佐渡の金銀輸送、善光寺参拝路として賑わっていた。本陣一軒、脇本陣二軒があったという。明治になって鉄道などの開通により宿場の機能は失われたが、宿場時代の広い部屋を利用した養蚕の町として生まれ変わった。一部、大屋根の上に見える小屋根は「気抜き」と呼ばれ、蚕室の換気のために造られた施設だと言う。町の東端にある白鳥神社前に広がる千曲川原（白鳥河原）は『源平盛衰記』に語り継がれた、木曾義仲の挙兵の地「勢揃」の場である。

夕闇せまる頃、バスは帰路につき横浜駅へと向かった。

盛りだくさんの史跡と現地での専門研究者の案内・解説を「売り」にしている夏季史跡踏査。手前味噌ではあるが、こんなに充実した内容の割に安い費用。是非、多くの皆様の参加をお願いいたします。



①大善寺薬師堂



②釈迦堂博物館



③積石出し二番堤



④釜無川の聖牛列



⑤森將軍塚古墳



⑥象山地下壕内



⑦松代城跡



⑧海野宿の家並み